

水の重み

沖縄県

南風原町立南風原中学校

三年

平田

菜乃華

水。「私にとって水とは何だろう？」そう自分に問いかけた。普段当たり前のようにある水。「蛇口をひねれば水」という言葉は誰もが耳にしたことがあるだろう。そのため、身近にある水に対して特別に思うことはなかった。

しかし、ある写真を目にしてから水に対しての思いが変わった。学校でSDGsの学習をしている際に見た写真だ。二〜三歳の子が汚れたバケツに泥水を入れ、飲んでいる写真だった。異様な姿に驚いた。すごく悲しかった。「幼い頃からこの水を飲んでいいのか。」「いや、どんなに汚くてもこの水を飲むしかないのか。」心が痛んだ。この現状を変える方法はないのか、考えた。水をろ過すればきれいで安全な水が飲めるのではないかと思った。

そこで、私は「泥水を自作のろ過器を使い、安心安全な水にする」という自由研究をすることにした。浄水場のしくみを参考に、砂や石、綿などを入れ、ろ過装置を作り、土と水をまぜ、石や草、虫が入った泥水を流した。ろ過を三回くり返し、二時間ほどでコップ一杯分の水ができた。初めの泥水よりだいぶ透明になったが、まだ安心して飲める水にはほど遠かった。その後、水を煮沸し、殺菌し、残った水をどのくらい汚れているか、薬品を使い調べてみた。するともものすごく汚れていた。結果、安心安全な水は自作のろ過器ではつくれなかった。

その時は、安心安全な水が毎日好きだけ飲めることにとっても感謝したいと思った。安心安全な水をつくることはとても大変だと実感した。浄水場で働いている方々に感謝の気持ちを伝えたいと強く思った。「どうしたら感謝の気持ちを伝えられるだろうか。」また、「私が感じた安心安全な水がすぐそこにあるありがたいみは、どうやったら多くの人に伝わるのだろうか。」考えた末、水道コンクリールのポスターを自分で描いて伝えようと思った。

水道局の人から話を聞いたり、本を読んだりして、自分の思いを伝える為に感謝の気持ちをこめた、ポスターを描いた。キャッチコピーは「命をつなぐ・水をつなぐ」浄水場で働いている方と、健康で元気な私達が水を飲んでいる絵を描いた。すると賞をもらい、様々なショッピングセンターでしばらく展示することになった。私のポスターを多くの人に見てもらうことができ、嬉しく、胸が熱くなった。私のポスターを通して、多くの人に安心安全な水は、浄水場の方やダムを管理をしている方の苦勞を経て、今の私達がいるということを考え直してほしいとあらためて思った。だから私は、来年も水道コンクリールのポスターを描きたいと思った。

蛇口をひねれば透明な水。何の心配もいらない水。おいしい水。好きな時に好きなだけ飲める水。これは当たり前じゃない、ということ。SDGsの授業で見た写真やろ過器を使った実験を通して深く学んだ。「水を大切にしなさい。」「水に感謝。」「蛇口をひねれば水。」「今ではこれら一つ一つの言葉に重みを感じる。私達の生活に水は欠かせない。全ての人々が水と関わり生きていく。だからこそ、水のありがたみを知ってほしい。感じてほしい。私は、それを知って感じてもらうために、これからも自分にできることを探し、多くの人に伝えていきたい。

もう一度自分自身に問う。「私にとって水とは何だろう?」私はこう答える。「私にとって水とは日々感謝をする人生のパートナーだ。」